S R A — J A P A N　ニュースレター

Volume 1, Number 4.　February, 1989

発　行：　日本リスク研究学会(The Society for Risk Analysis: Japan-Section)
会　長：　末石　富太郎
事務局：　〒305 つくば市天王台 1-1-1
筑波大学社会工学系　池田研究室　発行責任者・事務局担当理事
TEL. 0298(53)5380　FAX. (53)5070　池田　三郎

--- 目　次 ---

1。第1回研究発表会報告
2。理事会報告
3。年次総会と特別講演とパネルディスカッションの開催
4。学会誌創刊号のお知らせと投稿原稿の募集
5。投稿規定（案）
6。事務局だより
6.1 SRA Journal の目次
6.2 共催講演会のお知らせ
6.3 リスク関連研究会議のお知らせ
6.4 本学会の紹介記事
6.5 新入会会員
7。会員の寄稿

1。第1回研究発表会報告

第1回研究発表会を終えて

研究発表会　担当理事　田中　勝
（国立公衆衛生院）

日本リスク研究学会主催の第1回研究発表会が去る12月10日東京港区白金台の国立公衆衛生院で開催された。これはリスク研究の交流の場としてリスクアセスメント、リスクマネジメントの研究促進を目的に開催されたものでリスク認知、放射線リスク、経済リスク、健康リスクなどの問題が扱われた。この研究発表会の準備には、企画実行委員会（担当理事として田中、広瀬、盛岡、池田）があたった。

まず最初に開会の挨拶を発表会責任担当理事の田中が行い、第I セッション（放射線）は大阪大学盛岡理事による進行で、レビューは放射線医学総合研究所の内山氏による「日本における放射線リスク評価研究の概況」が報告され、ひき続き 2編の一般発表があった。セッションII（経済）は、池田三郎理事が司会を行い、京都大学の西村氏によるレビュー

で、「生命保険におけるリスクのとらえ方」が発表された。午後から第III セッション（リスク認知）が行われ、東京女子大学の広瀬氏による進行により、東洋英和女子学院の岡本氏が「リスク認知とリスク・コミュニケーション」という演題でレビューを行った。最後のセッションIV（環境リスク）については、福岡大学の朝見氏による司会により、国立公衆衛生院の横山氏のレビュー原稿を田中理事が説明した。それぞれのセッションではレビューにひき続いて一般研究発表があった。閉会に当たっては、会長である大阪大学の末石富太郎教授による閉会の挨拶があり、 5時から懇親会に移った。

参加者登録は、78名で報道関係者その他の関係者もいれれば90名の参加がえられたと推定される。最初の研究発表会でありながら16編の発表論文が16人の発表者により発表され、しかも参加者90名というのは期待した以上の大きな成果であった。この成功には、マスコミの報道関係者の理解にもよる。日経産業新聞が12月 9日金曜日（発表会の前日）に取り上げ、また環境公害新聞でも大きく研究発表会の内容が紹介された。

この発表会の成功には、まずレビューする人 4名がその分野での活躍している人に声をかけて、論文発表の勧誘をしていただき発表論文を確保したことと、会場が東京で距離的に参加しやすいということ、日程が12月の年末の土曜日であったなどの要因が考えられるが、やはりこの発表の内容やメンバーの魅力によるところが大きかったものと思われる。

研究発表の内容は、読売新聞 1月31日の夕刊にイラストを混じえながら、取り上げられて説明されている（12頁参照）。発表された内容は、要旨集に取りまとめられている。要旨集は、 200部作られました。

研究発表会の収支であるが、この研究発表会の開催準備などで、印刷代等を含めても収支上92,669円の黒字になった。この機会に21名が入会申し込みされ、これも研究発表会の成果であったものと思われる。

第１回の研究発表会の成功により、第２回の研究発表会の企画が今行われている。これについては、ぜひ参加していただきたいし、第１回で出席できなかった人は、講演要旨集を残部がいくらか残っているので、事務局に申し込まれたい（会員2,000円）。なお、第１回研究発表会で発表された詳しい内容は、新たに創刊される学会誌に掲載する予定である。

２。理事会報告

第２回理事会は第１回研究発表会の当日に開催され、次のような議案の審議と決定を行いました。

日時：１９８８年１２月１０日
場所：国立公衆衛生院会議室
出席者：末石（会長）、朝見、池田(ｻ)、北畠、田中、中村、林、広瀬、盛岡、内山（小林の代理）、池田(ﾏ)（委任）、松原（委任）以上各理事、天野（監査）

(1) 前回議事録の確認と新会員の承認（1988.6.25 以後約80名）
(2) 総務、渉外及び会計中間報告。

特に、ＳＲＡ会長のDr.Covelloが１１月に来日されたときに会見された田中理事より、下記の事項について議論したことの報告があった。

a)ＳＲＡ理事会にＪＡＰＡＮ－Ｓｅｃｔｉｏｎより代表を出せること（投票のため候補者という形式か、地域代表（この場合は、議決権なし）という形式のどちらか）。

b)若干の財政援助と講師の派遣（ＳＲＡの予算）が可能。

この件には事務局で対応することが決まった。

(3) 第２回研究発表会の企画

第２回目は関西在住の理事の方々（池田(ｱ)、黒田、盛岡）に企画をお願いすることになった。

開催時期　１９８９年１１－１２月、

開催場所　未定

企画テーマ：例えば：医療、エネルギー、廃棄物処理、流通・広告、その他

(4) 学会誌の創刊に係わる年会費の増額及び賛助会員の確保の件

事務局の池田(ｻ)より学会誌の創刊について下記の提案があり、次の総会で承認をうけることを前提として準備を進めることとなった。

a)　研究発表会の発表論文を中心に年１回発行する。

100-120頁	(1)	研究発表、寄稿論文　10-12編	80頁
250部	(2)	解説、講演、学会通信	40頁

b)　費用概算　学会でＤＴＰを行い、編集済みワープロ原稿で写植出力、印刷、製本をする場合　約60万円程度

c)　会費の増額　上記の学会誌の発行費用を賄うためには

正会員	4,000	x	150	=	600,000	（約180名の会員の場合）
又は	5,000	x	120	=	600,000	（約150名の会員の場合）
賛助会員	30,000	x	10	=	300,000	（この収入の確保が必要）

(5) 事務局担当者の依頼の件

学会事務局の能力を増すために中村　豊氏（筑波大学社会工学系講師，正会員）を依頼することが承認された。

３。年次総会と特別講演及びパネルディスカッションの開催の件

広瀬理事（東京女子大）に企画をお願いすることになり，現在、講演のテーマ、パネリストの交渉が進行中です。ＳＲＡ本部から”講師派遣”の可能性がありますし、是非この日時を空けていただいてご出席を予定して下さい。（定例総会、理事会も開催予定）。

開催日時：１９８９年６月２３日（土）午後１－５時（予定）

開催場所：東京女子大学文理学部心理学教室（東京都杉並区善福寺 2-6-1、
中央線西荻窪駅バス５分(吉祥寺行)）

講演とパネルディスカッション・テーマ：「防災と環境リスクの新しい視点（仮題）」

講演者：石　弘之氏　（朝日新聞編集委員、地球環境リスク）

伊藤和明氏　（ＮＨＫ解説委員、自然災害のリスク）

4。学会誌創刊号のお知らせと投稿原稿の募集

12月10日に開かれました本会理事会にて研究発表会のレビューと研究報告を主体とした学会（論文）誌を本年 5月に向けて発刊することが決定されました。5。の『投稿規定』と『原稿作成要領』を暫定案でありますが熟読の上、以下のどれかの形式にて、投稿していただけるようお願い申し上げます。ご予定がありましたら至急事務局までご一報下さい。

形式：(1) 研究論文　(2) 解説論文　(3) 寄稿論文

投稿論文の必着を 3月31日とします。

5。投稿規定（案）

日本リスク研究学会誌
投稿規程及び原稿作成要領（案）

投稿する方へ

投稿者は『投稿規程』と『原稿作成要領』を熟読し、これに従って原稿を書いて下さい。この規程に添わない原稿を送られると、編集関係者に不必要な労力がかかり、投稿者自身も書き直しの他無駄な労力を費やすことになり、発表も遅れることになります。

日本リスク研究学会誌投稿規程

1989年　月　日制定

1。総則

1.1 『日本リスク研究学会誌』（以下、学会誌と呼ぶ）への投稿はこの規程による。

1.2 投稿者（そのうち少なくとも 1名）は本会会員でなければならない。ただし、編集委員会が承認または依頼したものはこの限りではない。

1.3 投稿原稿は一般に公表されている本会以外の刊行物に未発表のものに限る。ただし、編集委員会が承認したものはこの限りではない。

1.4 投稿原稿の採否は編集委員会が決定するが、研究論文の採否については編集委員会が委託する査読委員（複数）の審査の結果にもとづく。解説論文は編集委員会が依頼する。編集委員会は投稿原稿について訂正を求めることがある。

1.5 原稿の作成にあたっては本会が定めた執筆要領に従うものとする。

1.6 学会誌に掲載された記事についての責任は著者が負うものとする。

1.7 学会誌に掲載された論文などの出版権は、本会に属するものとする。

1.8 研究論文の投稿は本会が主催または共催する講演会で発表したものが望ましい。

1.9 研究及び寄稿論文はその一編で完結したものに限る。

2。記事の分類

投稿原稿は以下の分類に従う。

研究論文：リスクに関する理論または実証研究における会員の独創的な研究成果をまとめたもので、その内容が学術上、公共上または産業上の発展に寄与するものとする。

寄稿論文：研究論文以外のリスクに関する評論または、まだ研究論文として完成されていないが重要性のある研究報告・速報（本学会の研究発表会に発表されたものも含む）で、その内容がリスク研究の発展に寄与するものとする。

解説論文：リスクに関連する特定の分野または関連するいくつかの分野にまたがった幅広い知識を提供するためのものとする。

3。原稿の提出

3.1 原稿の表紙は『原稿作成要領』に従い、所定の事項を記入する。

3.2 原稿はワープロ（一太郎、松に限る）にて『原稿作成要領』に従って作成し、フロッピーディスク（ 5インチ、 3.5インチ）にて投稿する。

3.3 原稿が本会に到着した日をもって受付日とするが、訂正を求められた原稿が指定期間内に訂正されない場合には、最初の受付日は無効となる。

3.4 原稿の長さは編集委員会で特に認めたもの以外は、研究論文 8頁以内、寄稿論文 6頁以内とし、解説論文は編集委員会がその都度定める。

3.5 論文には 150語を限度とする英文要旨をつける。

3.6 論文は『原稿作成要領』に従い、A4用紙に出力（表題、著者名、所属、英文要旨、本文、図表を含める）したもののコピーを 2部とオリジナル図表を提出する。

3.7 原稿の投稿先は日本リスク研究学会事務局（〒305 つくば市天王台1-1-1 筑波大学社会工学系　池田研究室気付）とする。

日本リスク研究学会誌原稿作成要領

1989年　月　日制定

1. 投稿原稿は和文または英文とし、和文の場合は英文の表題、著者名（ローマ字書き、フルネーム）、英文要旨を第一頁に、、著者の所属（和文と英文）を最終頁につける。
2. 和文原稿はなるべく当用漢字および現代かなづかいを用い、口語体とする。和文原稿中の外国語はできるだけ和訳し、不必要に外国語を用いることはさける。
3. 英文原稿の書式については編集委員会と相談することとする。
3. 図は白紙または青緑の方眼紙にトレースし、そのまま写真製版可能なようにする。図の大きさは約半分に縮小できるものが望ましい。
4. 表の見出しはその上方に、図・写真の見出しは下方に、両者の注記、説明等はすべて見出しの下方に記載すること。図表の表題と説明はすべて英文とする。
5. キー・ワードは英文で各 3語以内で三個以上五個以内とする。
6. 割付は 2段組、40行、各行22字詰めであり、最大頁数は 8頁とするので、ワープロのテキスト・ファイルのサイズは22字×最大 640行とする。
7. フロッピー・ディスクとは別に以下の要領で A4 用紙に表題、著者名、英文要旨、本文、図表、参考文献等を割付したものも送付すること。

上端マージン＝25mm　　下端マージン＝35mm
右端マージン＝15mm　　左端マージン＝15mm

8. 本文中の引用は著者名（西暦年）とし、同著者で同年の文献がある場合は小文字のアルファベットをつける。ただし、年数は半角表示にすること。

単著の場合：　池田(1987), Baumol(1988a), Baumol(1988b)

二人の連名の場合：　池田、坂下(1986), Gist and Mott(1988)

三人以上の連名の場合：　池田等(1988), Gist et al.(1989)

9. 引用文献は最後に筆頭著者名のアルファベット順にならべる。掲載誌名の略記は慣例による。ただし、文献名は省略してもよい。

参考文献例：池田(1987) 文献名、掲載誌名、巻、号、頁。

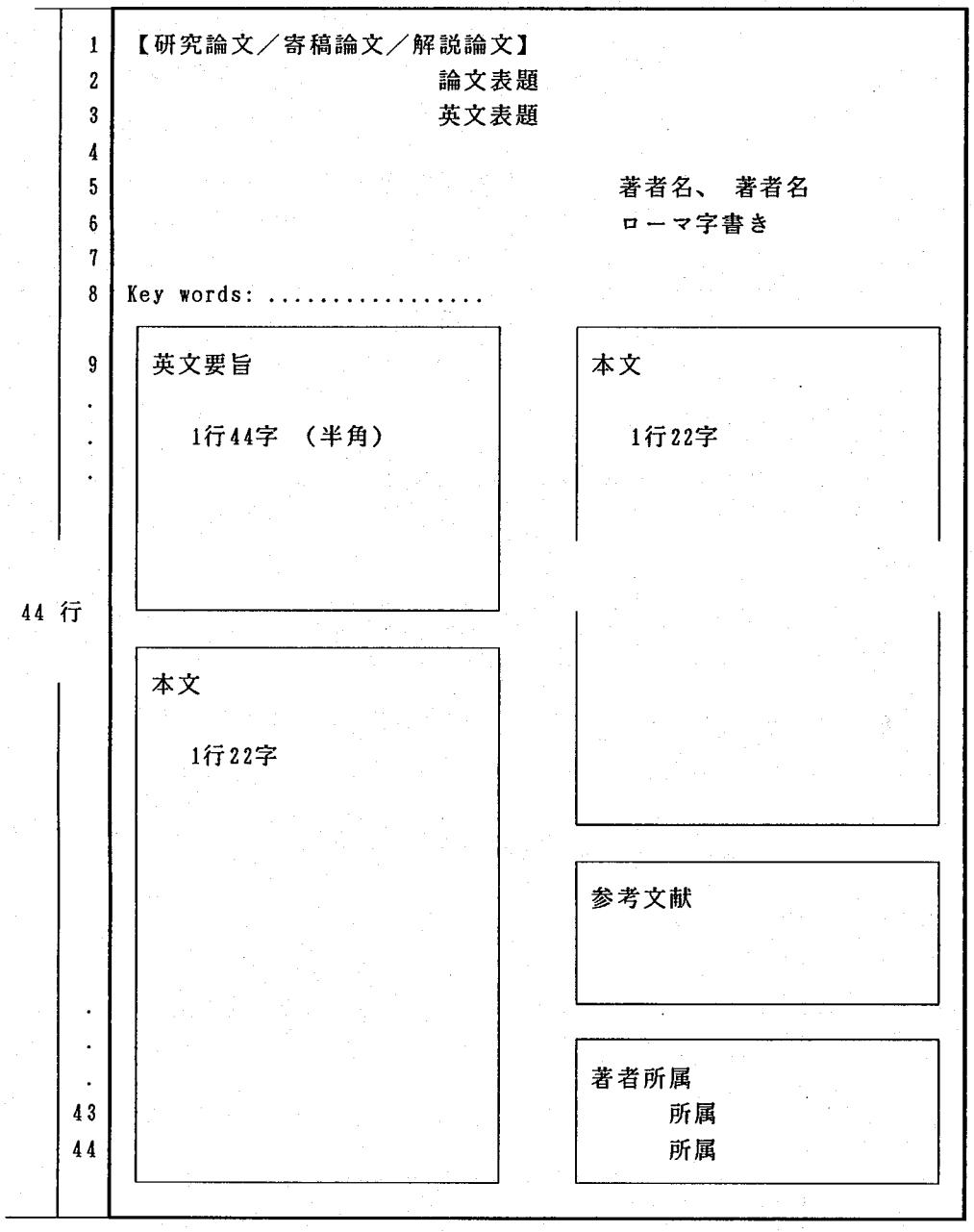
池田、坂下、北畠(1988) 文献名、掲載誌名、巻、号、頁

Gist, A.B., and Mott, F.R. (1988a) .....

Gist, A.B., Abel, G.T., and Mott. F.R. (1986) .....

10. 脚注は認めない。

11. 学会誌の割付例


1
2
3
4
5
6
7
8
9
44 行
43
44
【研究論文／寄稿論文／解説論文】
論文表題
英文表題
著者名、 著者名
ローマ字書き
Key words: .....
英文要旨
1行44字 （半角）
本文
1行22字
本文
1行22字
参考文献
著者所属
所属
所属

6。事務局だより

6.1 SRA Journal の目次

学会誌 RISK ANALYSISの Vol.8, No.4が事務局に届きましたので、その目次をお知らせいたします。論文のコピーのご希望があれば、コピー代(15円／枚)と郵送料を併せて郵便切手にてご請求下さい。

Risk Analysis

Vol. 8, No. 4 **December 1988**

CONTENTS

GUEST EDITORIALS

Risk Analysis in Developing Countries 475
Corazon Pe Benito Claudio

Focus Groups and Risk Communication: The "Science" of Listening to Data 479
William H. Desvousges and V. Kerry Smith

ARTICLES

One-Hit Models of Carcinogenesis: Conservative or Not? 485
John C. Bailar III, Edmund A. C. Crouch, Rashid Shaikh, and Donna Spiegelman

Hazardous Waste Incineration at Sea: EPA Decision Making on Risk 499
Daryl W. Ditz

Linking Indoor Air and Pharmacokinetic Models to Assess Tetrachloroethylene Risk 509
Kenneth T. Bogen and Thomas E. McKone

Carcinogenic Risk Assessment with Time-Dependent Exposure Patterns 521
Duncan J. Murdoch and Daniel Krewski

Correlation Between Carcinogenic Potency of Chemicals in Animals and Humans 531
Bruce C. Allen, Kenny S. Crump, and Annette M. Shipp

COMMENTS AND RESPONSE

Comments on Allen *et al.* 545
Ronald Hart and Angelo Turturro

Comments on Correlation Between Carcinogenic Potency of Chemicals in Animals and Humans 549
Edmund Crouch

Species Correlation of Chemical Carcinogens 551
Christopher J. Portier

Epidemiology Versus Risk Assessment: Resolving Some Old Controversies 555
Ellen Silbergeld

Response to Comments on Correlation Between Carcinogenic Potency of Chemicals in Animals and Humans 559
Bruce C. Allen, Kenny S. Crump, and Annette M. Shipp

ARTICLES

The U.S. Nuclear Regulatory Commission Safety Goal Policy: A Critical Review 563
Vicki M. Bier

The Effects of Driving Age, Driver Education, and Curfew Laws on Traffic Fatalities of 15–17 Year Olds 569
David T. Levy

Risk Assessment Criteria for Radioactive Waste Disposal 575
James O. Corbett

Evaluation of the Quality of Safety and Risk Analysis in the Chemical Industry 581
Jouko Suokas

Comparing Expressed and Revealed Preferences for Risk Reduction: Different Hazards and Question Frames 593
Timothy L. McDaniels

Quantitative Risk Assessments as Evidence in Civil Litigation 605
Vern R. Walker

Expert Scientific Judgment and Cancer Risk Assessment: A Pilot Study of Pharmacokinetic Data 615
Neil C. Hawkins and John D. Graham

SOFTWARE REVIEW

Material Safety Data Sheet and Community Right-to-Know Management System 627
James E. Brower

SOFTWARE LISTINGS 631
Paul D. Moskowitz

BOOK REVIEWS 633
Robin K. White

6.2 共催講演会のお知らせ

第４回環境工学連合講演会
(4th National Congress for Environmental Studies)

統一テーマ　『環境の規制から環境の創造へ』

主催　日本学術会議環境工学研究連絡委員会
共催　（社）日本化学会，◎（社）化学工学協会，（社）日本分析化学会，（社）土質工学会，（社）土木学会，（社）大気汚染研究協会，（社）日本土壌肥料学会，（社）資源・素材学会，（社）日本鉄鋼協会，（社）空気調和・衛生工学会，（社）日本セラミックス協会，資源処理技術研究会，（社）日本機械学会，静電気学会，粉体工学会，システム制御情報学会，（社）日本水質汚濁研究協会，（社）高分子学会，（社）日本建築学会，（社）日本水道協会，日本太陽エネルギー学会，（社）日本冷凍協会，日本リスク研究学会
（順不同，予定，◎印幹事学会）

１．日　時：　昭和６４年３月２３日（木），２４日（金）　の２日間

２．場　所：　日本学術会議講堂　（東京都港区六本木７丁目２２－３４
電話０３－４０３－６２９１　地下鉄千代田線「乃木坂」駅下車）

３．プログラム

総合司会　村上昭彦（化学工学協会／東京農工大・工）

第１日（３月２３日（木））

9:20- 9:30 開会挨拶　松本順一郎（学術会議会員，研連委員長，日大・工）
9:30-12:00 講演・討議「有害物質への対応」　座長　二瓶好正（研連／東大・生研）

○飲み水の安全性確保　佐藤敦久（土木・水質汚濁研究協会／東北大・工）
○室内空気汚染の諸問題と対策　吉沢　晋（空調・衛生工学会／公衆衛生院）
○生体内無機物質の必須性と有害性　原口紘忞（分析化学会／名大・工）

13:20-15:50　講演・討議「水環境を整える」　座長　岡田光正（研連／東京農工大・工）
○水辺の整備と今後の課題　樋口忠彦（土木学会／新潟大・工）
○野火止め用水・玉川上水の復活とその後　川原　浩（水質汚濁研究協会／東京都環科研）
○水辺環境保全のための物理化学的処理へのアプローチ　竹内　瑧（化学工学協会／明大・工）
16:00-17:00　特別講演　座長　松尾友矩（研連／東大・工）
○私の快適論　真鍋　博（イラストレータ）
17:15-　懇親会

第２日（３月２４日（金））

9:30-12:00　講演・討議「酸性雨に関する展望」　座長　氷見康二（研連／神奈川県公害セ）
○酸性雨の輸送と変換のモデリングによる解析　北田敏広（化学工学協会／豊橋技科大）
○酸性雨の研究動向　関口恭一（大気汚染研究協会／群馬県衛公研）
○製錬所における排煙脱硫法の変遷　村山勝男（資源・素材学会／公害資源研）

13:20-16:30 パネル・ディスカッション　「快適環境論」
座長　宮野秋彦（研連／徳山大・工），　杉島和三郎（研連／菱日エンジ）
○環境デザインと錯覚工学　下郷太郎（機械学会／慶応義塾大・理工）
○環境科学から環境工学へ　－建築環境評価の試み－　中村泰人（建築学会／京大・工）
○アメニティ論の展開と今後の方向　加藤三郎（土木・機械学会／環境庁）
○超微量物質を指標としてみた快適環境　四ツ柳隆夫（化学会／東北大・工）
16:30-17:00　閉会挨拶　明畠高司（研連／東工大・総合理工）
（備考）講演題目が若干変更される場合があります。

４．参加申込：
はがきに，所属学会，勤務先，同住所，氏名を明記のうえ，昭和６４年３月１５日までに下記幹事学会に申し込むこと。
112 東京都文京区小日向４－６－１９（共立会館内）　（社）化学工学協会内
「第４回環境工学連合講演会係」宛（電話０３－９４３－３５２７）

５．参加料：無料。ただし，講演論文集（定価約２５００円）を会場にて販売予定。

6.3 リスク関連研究会議のお知らせ

6.3 リスク関連研究会議のお知らせ

第９回産業医科大学国際シンポジウム・第１回汎太平洋協同シンポジウム

産業化による環境保健問題
— リスクアセスメントとその管理 —

The IX th UOEH International Symposium
and
The First Pan Pacific Cooperative Symposium

Industrialization and Emerging Environmental Health Issues
- Risk Assessment and Risk Management -

産業医科大学では毎年産業医科大学国際シンポジウムを開催致しておりますが、今年は第９回を迎え、国内外のこの領域における専門家を迎えて、上記のテーマでシンポジウムを開催致すこととなりました。皆様のご参加をお待ち申し上げております。

学会長：　土屋健三郎　（産業医科大学長）
事務局長：　吉村健清　（産業医科大学産業生態科学研究所教授）

日時：　１９８９年１０月２日（月）—６日（金）
会場：　産業医科大学ラマツィーニホール
〒８０７　北九州市八幡西区医生ケ丘 1-1

協賛：　ＷＨＯ　（世界保健機構）
ＵＮＥＰ　（国連環境計画）
ＵＮＤＰ　（国連開発計画）
ＵＮＩＤＯ　（国連工業開発機関）
ＮＩＥＨＳ　（アメリカ国立環境保健研究所）
ＵＳＥＰＡ　（アメリカ環境保護局）

一般演題募集（ポスターセッション）：　抄録締切は平成元年６月３０日

参加申込：　〒８０７　北九州市八幡西区医生ケ丘 1-1
産業医科大学
第９回産業医科大学国際シンポジウム
事務局長　吉村健清
TEL: 093(603)1611
FAX: 093(603)0158

6.4 本学会の紹介記事

12月10日に開催された本学会の研究発表会が1989年 1月31日付け読売新聞（夕刊）に紹介されました。

ニュースイラ

リスク学会

"危険度"を科学的に判定

確率千―百万分の一が対象

事例予想し、対応検討

初の発表会

「日本リスク研究学会」（会長・末石甲太郎阪大教授）という変わった名前の学会がある。昨年六月に発足した。「危険」か「安全」かをスッパリ判定できない複雑な問題の"危険度"を、科学的に評価し、対処の仕方を検討する研究だという。先ごろ東京で開かれた初の発表会をのぞいてみた。

（井川 陽次郎記者）

防災訓練は繰り返されるが、リスクコミュニケーションはうまくいくか？（都内で）

例えば、原子力発電、放射線、化学薬品、災害など巨大の剣を持った科学技術。さらにこれらに伴う保険、経済なども対象になる。

特に重要なのが、千分の一から百万分の一の確率で起きるリスクだ。一九七〇年代後半のアメリカで、環境汚染に対処する方法として、複雑的に研究が始まった。

同学会理事の池田三郎・筑波大教授がリスク研究の重要さを次のように指摘する。

「わが国では、一部限られたムラで『安全』『危険』が決められてしまい、決定の過程や、データなどを隠す傾向がある。本当は、可能性を米で研究スタート

ある村で――。

村長「原子力施設が落ちてくるらしい。どこに落ちるかは分からない。ヘリコプターを飛ばし、この村に被害がないかどうか確かめたい」

学者「でも村長、ヘリコプターが落ちる可能性は十万分の一。それに対し、施設がこの村に落ちる確率は千億分の一しかない。ヘリコプターが落ちる可能性の方が大きいですよ」

村長「これでも住民は、我々が何か対策を立てないと不安だろう。安心してもらうためならヘリコプター事故の可能性には目をつぶろう」

これは、発表会の議論で取り上げられた、たとえ話である。

リスク研究では、ヘリコプターが落ちる確率の評価などを「リスクアセスメント（評価）」、住民の不安と事故を天びんにかけ判断するのを「リスクマネジメント（管理）」、住民に何をどう伝えれば的確に情報が伝わるかを「リスクコミュニケーション」などと呼ぶ。

研究の対象になるのは、不確定な要素が複雑に絡みあって、さまざまな悪影響（リスク）が予想される問題をどう対処すべきかである。

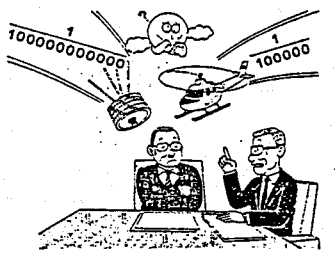


イラスト　北 館夫

進歩に伴い事故多発

国内では、科学、医学、工学、社会学、経済学など個別にリスク研究が行われてきた。しかし、新しい学問だけに、方法論がまだ確立されていなかったことから、学際的に交流し、研究を深めようという狙いで、学会が設立された。会員は現在約百四十人。

総合的に評価しく公表、あとは受益者の選択に任せる方が望ましい。アメリカではそういう姿勢になってきた。こうでないと、新しい複雑な技術を社会が受け入れるのは難しいだろう」

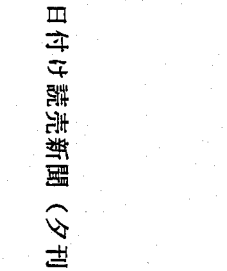
◇（科学技術の社会合意）

高度医療技術や心臓移植、自家用車、新幹線、原子力発電など十二技術について、選挙人名簿から無作為抽出した二百人を対象に価値観や想定などを調べた。この結果、心臓移植だけがリスクが有用性を上回っていた。（木下冨雄・京大教授の発表）

◇（アスベスト除去と歩行者の交通安全対策の効果）

単純化したモデルで考えると、アスベスト（石綿）の除去対策は、死亡率を高く見積もらないとコストに見合わない。そのコストは交通安全の歩行者保護対策と同じ程度。ただ、歩行者を守る施設の効果は、年々低下する傾向にある。（東工大院生・村山武彦さんの発表）

日航ジャンボ機の墜落事故を挙げるまでもなく、科学技術の進歩や社会の複雑化に伴う事故の多発で、リスク研究が脚光を浴びてきたのだ。



初の発表会では「放射線」「薬害」「リスク認知」「健康リスク」の四つの視点から最新の話題が紹介された。

◇（チェルノブイリ原発事故の影響）

事故後一年間の日本人の被ばく線量は三ケ月、センワムなどで平均百万分の五シーベルト。これで発生するガン死は大例で、わが国の年間ガン死者数二十万人と比較しても、無視できるリスクアセスメントである。（放射線医学総合研究所、小林定喜・総括安全解析研究官らの発表）

◇（パニック神話）

災害時にパニックは起きない、というのがアメリカの社会学者の定説になっている。むしろ、災害予測や確報報道に住民が反応せず、対応が遅れる上の方がリスクコミュニケーション上の課題である。（東洋英和女学院短大、岡本浩一講師の発表）

6.5 新入会会員紹介（1988.12 -1989.2）

青山　喬	滋賀医科大学　放射線基礎医学講座 大津市 瀬田月輪町	0775-48-2205
米原　英典	滋賀医科大学　放射線基礎医学講座 大津市 瀬田月輪町	0775-48-2207
木原　正哲	木原微生物研究所 東京都狛江市 東和泉１－２５－８　錦荘２０５	03-480-8576
飯島　伸子	桃山学院大学　社会学部 大阪府堺市 西野２３７－１	0722-36-1181(419)
笠井　篤	（株）数理計画　研究開発室 東京都文京区 後楽２－１６－１	03-816-2121
緒方　裕光	国立公衆衛生院　放射線衛生学部 東京都港区 白金台４－６－１	03-441-7111
吉村　健清	産業医科大学　臨床疫学 北九州市八幡区 医生ケ丘１－１	093-603-1611
田中　敦	東京大学大学院　社会学研究科 東京都文京区 本郷７－３－１	03-812-2111(3870)
菅原　章文	（株）三菱総合研究所　社会公共システム部 東京都練馬区 光が丘６－１－４－４０２（自宅）	03-975-9762
杉沢　登	大東京火災海上保険　総合企画室 東京都中央区 日本橋３－１－６	03-274-7901
渡辺　敦	栗田工業（株）研究開発本部　業務部　企画課 東京都新宿区 西新宿３－４－７	03-347-3281
高尾　厚	神戸大学経営学部 神戸市 灘区六甲台町２－１	078-881-1212(3553)
佐藤温吉郎	（株）原子力代行 東京都中央区 銀座５－５－１２	03-571-6059
木下　芳広	カリオアナリシス 東京都渋谷区 千駄ケ谷４－２７－１　ソフイエ北参道２０３	03-479-8146
松村　治夫	国立公衆衛生院　衛生工学部　廃棄物処理室 府中市 武蔵台３－４４－２（自宅）	0423-21-3458
高松　善一	（株）環境管理センター 八王子市 久保山町２－４６－２－２－２０４（自宅）	

千葉　廉	東北放射線科学センター 仙台市 １番町１－１－３０　やまと生命ビル４Ｆ	022-266-8288
伊藤　玲子	国立公衆衛生院　専攻課程　環境コース 東京都町田市 成瀬１１５２－２－７－２０５（自宅）	0427-25-6586
加藤　雅久	武蔵野美術大学大学院　造形研究科 東京都世田谷区 駒沢５－２１－１（自宅）	03-702-5418
加藤　正信	（株）三菱化成安全科学研究所　鹿島研究所 鹿島郡 波崎町砂山１４	0479-46-2871
秋田　康一	東京大学名誉教授　　茨城大学名誉教授 鎌倉市 御成町５－１０（自宅）	0467-22-4342
山川　欣司	ベクセル（株）　技術部 東京都世田谷区 船橋５－１７－２２－４０３（自宅）	03-304-6074
明畠　高司	東京工業大学 横浜市 緑区長津田４２５９	045-922-1111(2452)
磯部　進一	日本農薬（株）　環境安全部 東京都中央区 日本橋１－２－５	03-274-1887
中島　敬行	名古屋大学工学部　原子核工学科 名古屋市 千種区不老町	052-781-5111
安田　陽一	安田技術研究所 東京都大田区 大森西２－２９－１９	03-762-7060
酒井　泰弘	筑波大学社会科学系 つくば市 天王台１－１－１	0298-53-4096
加藤　正平	日本原子力研究所　保健物理部 茨城県那珂郡 東海村白方白根２－４	0292-82-5195
佐成　重範	（財）食品薬品安全センター 東京都港区 虎ノ門１－１５－１２　日本ガス協会ビル３Ｆ	03-503-0491
生瀬　博之	三菱金属（株）　原子力技術センター　技術第２部 東京都中央区 日本橋蠣殻町１－３８－９	03-663-7442
岡本　浩一	東洋英和女学院大学　人文学部　人間科学科 東京都品川区 東品川３－１４－３４－４１４（自宅）	03-450-6005
小椋　敏夫	日本エアシステム（株）　安全推進委員会事務局 東京都大田区 羽田空港１－７－１	03-747-6254

7。会員の寄稿

Newsletterへの寄稿を募集しています。現在の研究テーマ、関心事、自己紹介、提案、などお寄せください。到着次第、順次掲載する予定です。

会員寄稿Ｎｏ。１　　薬師寺泰豪　現代マネジメントセンター（理事長）
現代経営問題研究所（所長）

RMの形態区分 (1)Personal (2)Family (3)Cooperative (4)Government
RMにかかわる論文テーマ：

(1) 「企業危機を回避するための指導法とリスクマネジメントスキルへんの考察」、企業を取り巻くリスクの総括的展望。昭62.7.4. 第20回経営士全国研究会議新潟大会。
(2) 「企業危機を回避するための指導法とリスクマネジメントスキルへの考察」Part II、CEO のパーソナルリスク、一般的ファミリーリスクの予知、予防とコンティンジェンシー、プランの創出、昭63.7.3. 熊本大会で発表。
(3) 論文審査委員会でパスしたら昭64年は東京大会なので Part III を発表の予定。

講座：「リスク、マネジメント、マネージャー養成講座」（社）大阪府経営合理化協会主催、リスクマネジメント専門委員会委員 4名が担当、昭63.6.15 ～16有料にて開催、小生も講師。
著書：「安全経営への道しるべ」＝「危機管理」マニュアル、大阪府 I.B.C. リスクマネジメント専門委員会グループ著、発行所（社）大阪府経営合理化協会、本書の特徴は「倒産原因と対策」をＴ型マトリックスでまとめている。小生も副座長として執筆参加。

・グループとして「国際編」をめざしている。
・独立した「リスクマネジメント研究会（所）」弁護士、会計士、税理士、不動産鑑定士、一級建築士などに呼びかけて設立したいと思っている。